



TITLE:

中山[道]温泉雜記

AUTHOR(S):

O・A

CITATION:

O・A. 中山[道]温泉雜記. 地球 1924, 2(1): 289-295

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182683>

RIGHT:

豆煙管の火皿の如く、此處だけが熔岩の流れた小火山で火口内で硫黄を採つたことがある。平地が多いので甘蔗糖業や天日製鹽業が行はれて、此の島のみは移民が頗る多い。

相模灣から汽船で行けば八丈島父島母島を経て此の島が航路の終點になつてゐる。其の間に氣候がすん／＼變るのが著しく、黒潮の正面にぶツつかる八丈島は伊豆海岸よりも雨量が遙かに多いが小笠原は餘程減じ、中硫黄島に至れば全く寡雨の熱帶地方と同じ氣候になつて、其代りに時々驟雨が來るので、露兜樹ココヤシから其のじづくを引いて甕中に天水を貯へて僅かに飲料水とするのである。

こんな譯で湯を沸かす水などは得られぬが、幸に本山の火口の縁に一つの噴汽坑があつて、

熱い蒸汽が絶えず噴いてゐるから、住民は其上にタコノキの葉で葺いた小屋を造つて蒸汽の屋根に當つて其簷から出て來るのを身體に受けて露天の蒸汽浴をやつてゐる。又た常食に供する摩芋も地に二尺ばかりの穴を掘つて之に入れて上に草を詰めて置けば疎鬆な浮石層を透して噴出する蒸汽で天然料理 Natural Cooking が出来る杖の先で地に孔を穿つて指を入れると焼けさうに熱い。

大正元年八月の東京地學協會の旅行に行つた時の此の經驗は八十餘人の一行で島民の歡迎を受け、島の名物たる西瓜を茶の代りに一人で一顆以上を平らげて舌鼓を鳴らした連中が少なくなつた。(如舟老人)

中山道温泉雜記

淺間温泉

中山道温泉雜記

もう何年か前だ妙高山の中腹で正月を送り、

○

A

殆ど一寸先きも見えない大吹雪の日に山を下つて、私は諏訪湖によつて東京に歸る爲め、中央線の一列車に乗つた姨捨山の峠を越えて汽車が松本平に出た頃は既に夜が更けて、汽車の疾走する音だけが徒らにゴウ／＼と耳に響いた。其の夜は皎々たる明月で、日本アルプスの銀峯は月の光りを受けて淡白の天窩の下で曠莫たる平地の上に夢の様な姿をぞつしりと据えて居た。此の時から日本アルプスの印象は私には深い。

松本に下車すると浅間温泉行きの自動車がある。松本市の東北郊一里餘山に登りかゝつた處に此の温泉がある。信州では先づ設備の一番よい温泉である。閃綠玢岩に源があると思はれるこの温泉は、此處では第三紀層の頁岩の間から湧き出して居る。優雅な浴槽に湛へられた此の清澄な温泉は俗塵を洗ひ落す爲めに設けられた筈であるけれども、松本の機業地を控え、同時に鐵道の沿線に近いので、寧ろ弦歌亂舞の巷として榮えて居る。婢女も魚介も多く直江津方面から供給されるから、山の中にしては頗る上等

のものが多し。然し浅間温泉の特徴は必ずしも此の點ではない。高樓の欄に倚つて西南方を下瞰すれば、松本の市街は一目の間に見え、やがて梓川の銀蛇が廣大な沖積扇狀地を割つて流れて來る所を迹上れば、白雪皚々たる日本アルプスの連嶺が見える。此の雄大なる大山脈の遠望こそは浅間温泉に與へられたる絶大なる天恵である。

松本から東の方に入つて行くと入山邊の鉄鑛泉や扉温泉などがあるけれども都人士の訪れるべき程の所でもない。

上諏訪温泉

何時醒めたとも知らず目醒めて窓をやれば、湖水は一面の靄である。岸の楊柳が影繪の様に湛んやりと浮き出して居る。庭に下りて影を求めて進めば、何處からともなく汀が始り靄を溶かした湖水が一體に廣ろがつて、その先きは靄となり、灰色の模糊たる中に、自分の影だけがつきりして居る。夢心地で館に歸つてモザイクに墨んだ湯船にひたると温みが次第に沁みて

來て、益々無我の境に落ちて行く。無色無臭の

此の温泉は到底神經衰弱以外の病氣を癒はす所ではないらしい。炎熱七八月と嚴寒の一二月とは都人士の爲めに上下の諏訪温泉が一番混雜する時だ。此の温泉の學問上の研究は上諏訪中學の三澤先生が一番精しくやつて居られる。上諏訪の布半別莊はよい所だ。

別所温泉及其の他

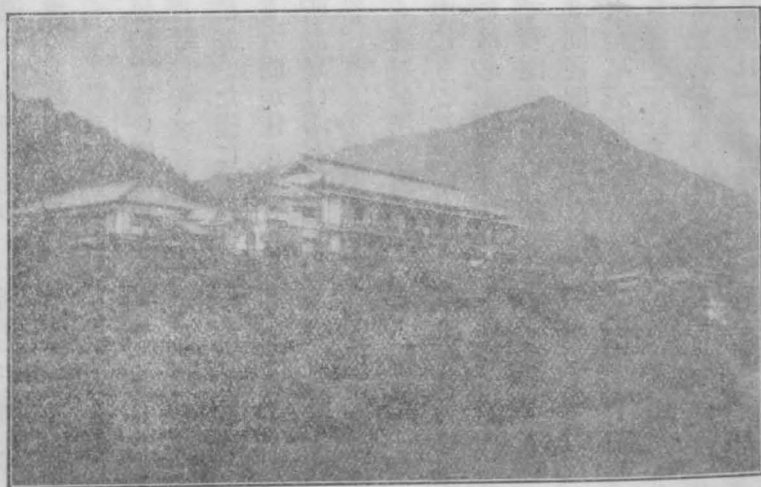
上田市から西方を眺望すると、西南及び北の三方を高峻な山岳に圍まれた中に一の盆地がある。此の盆地の中に夫神岳、女神岳が相並んで孤立し、ピラミッドの様な形をなして聳えて居る。此の山地の東麓にあた

り一塊の密な人家の聚落が見える。これが別所温泉だ。上田市より三里

電車が通つて居る。

花屋ホテルの二階に立つと、直ぐ前方には第三紀層の緩漫な丘陵地が見え、其處には麥が一面に生えて田園に在る思ひがする。此處の山の或る所からは魚の化石や鯨の骨が出たり、又玄能石が飛び出したりする。

東北に目を轉すれば上田の街が遙るか遠くに見え、殊に夜灯が燦めく時が嬉しい。それから更に後方に目をやれば地形は次第に高まつて淺間山の西北にある所の草津白根までの火山が悉く見え



信濃別所温泉

る。眺望數千平方里、一目を遮るもの無き此の視野は他の溫泉ではなか／＼求められるものではない。

さはれ別所溫泉の印象は溫泉地でない様な土地にある溫泉の一語に盡きる。若しロマン・ローランがジャンクリトプの中に書いた様に、最も刺戟の少ない土地が一番長く人間が住んで居られる土地であるならば、別所溫泉は滞在に適した溫泉であると言へる。

石湯では閃綠玢岩の割目から溫泉が湧き出して居る。郵便局の奥の谷川の中にもこんな所がある。又久我湯は雨が降る前には必ず濁る。これは此の土地のパロメーターで新聞に出る天氣豫報の程度には當るらしい。共同湯四個の外に内湯も可成ある。少こし硫化水素臭がしていくらか白濁のある溫泉である。

獨鈷山の鋸齒峯は妙義山の趣きがあり、山又山のその後には聳ゆる美ヶ原の高原は一寸日本の屋根と言ひたい様な感じがする。子檀嶺山などは名前から悽く確かに見る價值のある山である。

斯うして數えたてれば別所溫泉の附近には可成散歩に適した所がある。

夫神岳を西に越えるとき沓掛溫泉があるが共同湯が一つで然もそれが微温ぬるいのだから、先づ紹介する程の事もない。これから南に一里、上田から來る電車の終點から十町程西の山に這入ると田澤溫泉がある。別所溫泉と泉質は同じで、旅館も亦堂々たるものがあるけれども、全く山の中にあるだけに別所程見晴らしもよくない。

上田市の一つ東の停車場大屋驛で丸子鐵道に乗り換え、終點の丸子から西行して内村の斷層谷に這ると、石英閃綠岩から誘導された正長斑岩或は石英斑岩に關係ある靈泉寺溫泉及鹿教湯溫泉がある。此の谷の夏は涼しく、秋の紅葉はすばらしく美しい。

日光湯本溫泉

夕方湖畔にさしかゝると湖面からの明るい反射光線が、紅葉のトンネルの下側から射し込んて來る。夕日は斜めに上から注いで居る。此の紅葉の橙赤と此の湖水の紺碧と、實に稀れる色

彩の中を我々は一里餘り湖岸を繞うて進んだ。道が北に曲ると羊腸の小坂を暫らく辿る。日光白根やその他の火山から出る水を一筋に集めた湯川の水は、此處に掛つて龍頭の瀧となる。残光漸やく褪せて、折りからの雲が又一しきり湧き起ると、夜の帷は慌しく下されて仕舞つた。雲の後には日があるのだらう。ほの明い雲が暗々として遙るけき一路の其處此處に残つた水溜りを淡く光らして居る。兩側の雨に濡れた白樺も亦銀幹の林を造つて居るお伽噺にでも出て來さうな夢幻の國を我々は現ともなく進むと、やがて、月明りの下に戰場ヶ原の曠野が展開する。枯木の大きな立木が處々に眞黒く立つて、いやが上にも荒れ果てた景色である。此の荒野の中途で道が岐れる處には牧場があつて、牧者の小屋から微かに灯が洩れて居る。無言の儘に我等は左の道についた。そして同じ曠野の一路をとぼ／＼と辿つて行く。間もなく一行は眞暗な林の中に入ると道は急に上り出した。瀧の音が聽える。此の音が下に聽える頃には道が平ら

かになつて我等はどう／＼湖畔に達した。暗黒な密林の曲路。その中を最後に手索りて進むと、急に硫氣が鼻をうつ。樹間に閃めく灯が見える。林を出ると宿の灯は湖面にまで反映して居る。道端の噴氣孔からは蒸氣が盛んに噴き出して居る。夢心地の中に我々は湯本温泉に着いた。湯につかり、夕食に腹を満すと再び我等は蕩酔の夢路を辿つた。深山の秋は靜かに明けて、仰ぎ見れば澄み切つた碧空を貫いて白根山の頂きは褐色の峨々たる山骨を現はし、鬱蒼たる森林は其の麓を繞つて幽邃の感を起さしめる。此の間に點在する紅葉の斑點は、やがて湖上に於いて一面の錦となり妍爛たる裾模様を織つて居る。湖の北岸には密生した葦があつて、其後から十數個の屋根が見えて居る。中禪寺湖への道は湖の東岸に沿ふて南に走り、西岸は直ちに起つて湖面から紅葉の山となつて居る。此の光彩陸離たる色彩の中を和船の艫を取つて湖上に漕ぎ出づれば、天然の環境に融合して、自我の世界は何處へともな

く消失して行く。船の流るゝに委かして「若きウエルテルの悲み」の一齣を讀めば、狂女が戀人の爲めに、秋の山に花を捜して居る一くだりが出て来る。

夕陽をうけて湯の湖の錦が一入映えるとき、男體の圓錐體が西半は赤紫色に東半は黝紫色に染まり、山の麓は紫の露で取り繞かれる。男體の山は此の時半透明な寶石の彫り物の様に見える。鱸を返へして、湯槽に入れば心地よき疲れに身を動かすのもゝのうく、暫らくは惚つとりとして居る。食膳には中禪湖でとれる小鱒がのせられる。夜には日課のトラップ遊びがある。

天高く晴れ渡つた晩秋の一日、岩角を攀ち、樹根につかまつて奥白根の山頂を極めた。關東第一の高山である。關八州は言はずもがな、西南は信濃飛驒の連峯から東北は藏王山迄、實に申分のない眺望だ。西北の噴火口は直ちに谷となつて千仞の斷崖を作つて居る。此の谷に山頂から一抱もある石塊を投げ込むと、其の反響は百雷の一時に起るが如く、全谷一齊に鳴り渡つ

て文字通に「空谷の跫音」を發する痛快の程度が過ぎて物慄くなり、取りかへしのつかぬことをして仕舞つたと言ふ恐怖の念にすら襲はれる。

妍爛の秋は一陣の木枯の風と共に忽ち去り、樹間が俄かに疎らになつたと思ふと、もう雪が降り出す。

ウイルヘルム、テルの中に彼れが亂狂するルチエルの湖を乗り切つて小船で逃れる所がある。幽邃閑雅な湯の湖の水面も谷間吹く一陣の突風に忽ち狂亂する。見る間に暗雲は空一面に漲り、天地晦冥、狂暴なる暴風の吼號する音が全山を慄はすと、寒氣は俄かに迫つて心臓も凍るばかりである。TとMと、Kと私とは二艘の和船を湖に出した。定めなき秋の空は忽然この突風を起して湖上に我等の命を弄んで居る。岸にあるGとKとは胸を戦しながら此の様を見て居る。我等は如何に船を操つたか知らない。兎も角湖岸に吹きつけられて命を拾つた。此の遭難中に齒を食ひしばつたと見えて食事のとき願がよく動かなかつた。それからひどい齒痛が

起つた。秋の夜は死の如き静けさの中に更けて行く。

翌朝、眼醒めると、湖畔は何時の間にか白衣を纏ふてもはや研爛の秋は何處へか辭し去つた

後だつた。

山と湖と温泉と、而して静寂閑雅なる環境と、日光の山奥、湯本温泉は實に若者の樂園である。

登別温泉

(ストープス嬢の日本日記)

(明治四十二年)九月七日——私は登別へ來て宿つた。停車場から十哩ばかりで、それは村落の外では未だ曾て私の見たことのない悪い道路がついてゐる。如何して我々はその谷地^{やち}とわだちを通り、如何して車輪があれ程ひどく前後左右に傾いて覆らずにゐられたか不思議でたまらぬ。途中で日はとつぷり暮れる、道の後半分は小さい阪を無茶苦茶に降りたり轍の上でガタついて來て、車と谷との間に纔か一呎ばかりの餘地しかなかった。が何事も起らなんだ。

九月八日——私は昨晩は半活動火山の火口中に泊つた!と言つた程はこわくなかつた。火

口はさし渡およそ一哩で、大部分深い森林になつた圓い溪の様になつてゐる。旅館から二三百碼の處に活動の名残があつて、孔や小さい圓錐や煮え湯の泡立つてる流れや硫黄がごつさり堆くなつた處などがある。煮える池の或る者が黒く堅さうに見え、或ものには小さいゲイサーがシュ〜と噴いてゐるが、大概のはおとなしく傍へ寄つてもよいが、二つ三つ危険で近寄れぬのがある。旅館の庭を眺めると、泡を立てゝ流れる熱湯の河から湯氣が雲を成して立つてゐるが、此の湯を利用して浴びるのである。案内書には馬鹿正直に「登別温泉へ行つて唯一つ困る